弾丸　 　 Puney Loran Seapon

　深夜零時。廃ビルの屋上で、スコープを覗きながら俺はライフルの引き金を引く。引いた瞬間、弾丸がおよそ三百メートル離れた所にいた、今回のターゲットであるどっかの会社の社長の頭に命中し、倒れた。

「まっ、こんなもんか……」

　サイレンサーをつけているので、音は出ない。社長の周りにいたガードマン達の表情から察するに、おそらく自分が撃ったということには気づいていないようだ。

　ターゲットが死んだことを確認した俺は、手早くライフルを仕舞って廃ビルを立ち去る。そして、用意してもらった逃走用の車に乗り込んだ。中には、運転手と、スキンヘッドのおっさんが一人。

　俺の顔で仕事がうまくいったことが分かったのか、おっさんはニヤリと笑う。

「ご苦労さん。ほいこれ、今回の報酬」

　そう言って渡されたのはやや大きめの紙封筒。中には札束が、ひい、ふう、みい……五つ。札束の厚さから察するに、五百万といったところか。

「ん、確かに受け取った」

「それにしても、いい仕事するねえ」

「まあ、プロですから」

「次もよろしく頼むよ？　ところでさ……」

　なんて感じでおっさんは雑談を始める。適当に相槌打ったりしていると、俺の住んでいるアパートの前で車は止まった。

「それじゃ、おやすみなさい」

　おっさんのその声に、手を振るだけで答えた俺は、速足で自分の部屋へと向かった。

　築数十年の、耐震性の危うそうな感じのボロアパートのうえ、部屋も六畳一間の狭苦しい和室に、俺は住んでいる。

　ここまでの経緯から分かるように、俺はプロの殺し屋だ。どっかの国のマフィアに雇われていて、さっき車に乗っていたおっさんは俺の上司。ちなみに殺し屋というのは、おそらく誰もがご存知の通り、人を殺す職業である。一歩間違えば、サツに捕まって長いことブタ箱に放り込まれかねない、危ない職だ。それでも年収は、そこらの人たちの倍は稼いでいると思う。なので、住もうと思えば、もう少し良いアパートに住めるのだが……人を殺して得たお金で贅沢をするのは、ちょっと気が引ける。

　あー、もっとマシな仕事がしたい。

　こんなことをこと考える俺が、どうして殺し屋なんかしているのか。愚痴らずにはいられないので、退屈だとは思うが、聞いてくれると嬉しい。

　今から十数年前のことだ。俺は長く、辛い受験勉強を耐え抜き、目標であった某難関国公立大学に入学した。しかし、入学したはいいが、受験勉強からの解放感から遊びに遊びまくり、結果として二回も留年をするはめになってしまった。なんとか卒業できるだけの単位は取れそうになったので就活を始めたものの、大学時代に遊びに遊んで、ろくすっぽ勉強しなかったやつを採用してくれる企業なんかあるわけもなく、「さすがにヤバいかも」と思っていたところに声をかけてきたのが、あの車にいたおっさんだ。当時、俺は射撃サークルに所属しており、そのサークルで出場した大会で俺の腕前を見て、運命を感じたのだとか。まあ確かに優勝したが、気持ち悪いことこの上ない。

　あの時、丁重に断っておくべきだったと後悔している。

　しかし、このまま路頭に迷うのも嫌だった俺は、二つ返事で殺し屋への就職を決めた。決めてしまった。

　くそう、なんて馬鹿だったんだ俺は。……なーんて今でも時々思うが、もう遅い。俺はこうしてプロの殺し屋として働き、それで飯を食っている。今更この職から足を洗ったところで、犯した罪は消えないのだ。

「……」

　俺は、自分の右手を見る。ついさっき、ライフルの引き金を引いた手だ。まだ、引き金を引いた感触が残っている。この仕事をはじめて、もう十年以上経つが、未だにこの感触は慣れない。

「寝るか……」

　そう呟いて俺は、部屋の隅に畳んで置いてある布団を敷き始めた。

　仕事が無いと、殺し屋というのも暇なもので、大抵俺は寝るか、本を読むかで暇を潰す。

　だが、今日は珍しくテレビを見ていた。普段はせいぜい見たとしても、ニュース番組くらいのものだが、今見ているのはサイエンスマジックショー。新聞のテレビ欄が目に留まり、面白そうだったから見てみた。だが、正直なところ、大して面白くない。

　しかし、テレビというのは恐ろしいもので、たとえ大して面白くない番組であっても、ついだらだらと見続けてしまう。丁度、今の俺のように。

「……本でも読むか」

　さすがにだらだらとテレビを見続けるのも問題だろうと思った俺は、光の屈折を利用したマジックが終わったところでテレビを消した。

「自殺志願者？」

　突然アパートにやってきた上司のおっさんの話を聞いて、俺はそんな台詞を発した。テーブルの上には、まだ若そうな青年の写真が1枚。おっさんの話をまとめると、以下の通り。

　という、どっかの会社のサラリーマンが人生に疲れたとかなんとかで、自殺したい。

　単純明快すぎて、まとめるまでもなかったのではないかと甚だ疑問がでるくらい短い文章になってしまった。全く、頭が痛くなりそうだ。人の人生の終わり方に文句を言うつもりはないが、自殺なら一人でしてくれと言いたい。

「まぁ、それができないから依頼してきたんだろ？」

　おっさんは笑いながらそう言う。何も、殺し屋に頼らなくてもいいだろうに。だって銃弾が体を貫くんだぞ？　絶対痛いだろ。俺なら躊躇するけどな。

　と、いうか、そいつにライフルを向ける奴の身にもなってくれ。

「でもなぁ、報酬はなんと、二千万だぞ？　破格の依頼じゃないか？」

「アホウ。そんな大金、あっても使わん。それに、そういう問題じゃない。自殺の手伝いなんか、俺はしたくないんだ」

「そんなこと言わずに、頼んだよ。もうどうせ何人も殺しているんだし、今更自殺の手伝いなんかしたところで、死んでから行くところは変わらないだろう？」

　そう言うとおっさんは、文句を言おうと口を開きかけた俺を無視して帰ってしまった。

　仕方ない。やるか……嫌だけど。

　そして二週間後、俺は、竹岡さんの住んでいるマンションから八百メートルほど離れたところにあるビルの屋上からライフルを構えていた。竹岡さんたっての希望で、午後三時頃に竹岡さんが友人を呼ぶので、その人の目の前で殺してほしいそうだ。なぜかは知らんが。

「……来たか」

　どうやら、竹岡さんの友人が来たようだ。その人を見て、俺はため息をつく。

「可哀そうにな……これから、友人が目の前で殺されるなんて」

　不本意ではあるが、俺はスコープを覗く。この時、スコープを覗いていない方の目をつぶってはいけない。覗いている方の目に、負担が掛かってしまうからだ。見なくてもいいから、しっかりと覗いていない方の目も開ける。標準を竹岡さんに合わせ、息を止める。そして、酸素不足で視界が霞まないうちに、ライフルの引き金を……

　俺はここで、ライフルを下した。

「どうして、殺してくれなかったんですか！」

　竹岡さんの友人が帰ったのを見計らって、俺は竹岡さんの部屋に押し掛けると、竹岡さんは顔を真っ赤にしてそう叫んだ。だが、俺はここで、銃口を竹岡さんに向ける。竹岡さんの顔から、血の気がさーっと引く。

「立派な水槽ですね……でも、すごく不自然だ」

　俺は窓のところにある、大きな水槽を見ながらいった。その前には、テーブルがある。だが、水槽の中には、八割くらいまでの水しか入っていない。本来なら、熱帯魚の一匹や二匹、いてもおかしくないはずだ。

「竹岡さん。あんた、俺のことを騙そうとしましたね？」

　ちょっと前に見た、光の屈折のマジックを思い出しながら、俺は厳しい口調でそう言った。

　あの時、水槽の前のテーブルに二人は座っていた。だが、太陽の位置のせいで、実際二人が座っていた位置と、俺が見ていた二人の位置が、微妙にずれていた。

「俺があんたを撃っても、それは水槽の水に写ったあんたの像。実際に弾丸がぶち抜くのは、あんたの友人ってわけだ」

　竹岡さんは怯えているのか、何も言わない。

「俺が殺してほしいと依頼されたのは、あくまでもあんただ。あんたの友人じゃない」

　そう言うと、俺は引き金を引いた。

　あれから二日後。昼飯を食い終わってのんびりとしていたころに、おっさんから電話がかかってきた。

「お前の思った通りだ。竹岡の友人には、多額の保険金が掛けられていた。受取人は竹岡で、その額なんと三千万だとよ」

　それを聞いて、俺はため息をつく。全く、とんでもない世の中だな。金のために、友人が殺せんのかよ。

「ところでお前、光の屈折のトリックなんか、よく気が付いたな」

　おっさんが、感心したような声でそう言った。

「きっかけは、水槽の上の、水が入ってなかったところですよ」

そこで見たテーブルの先端と、竹岡さんたちが座っていた位置が、かなりずれていたのだ。

「ほぅ、なるほどね。あっ、そうだ。報酬の二千万は、後でお前に渡すわ。それじゃ」

　おっさんはそういうと、電話を切った。別に、あの二千万はいらないんだけどな。

　俺は再びため息をついてから、窓の外を見る。いい天気だ。たまには、散歩でもしようかね。

　そう思った俺は、伸びをして、玄関へと向かった。

　　　 【あとがき】

　いつもはファンタジー系やアクション系しか書きませんが、今回は初めてこんな話を書きました。楽しんでくれたら嬉しいです。

　今回出てきたトリック、どっかですでに使っている人がいたら、ほんとすみません。パくるつもりはありませんでした。